

# 原爆投下と歴史・認識論

水本正晴(Masaharu Mizumoto)

北見工業大学

## 1. 原爆投下

昨年調査によれば、アメリカ人の60%は広島・長崎への原爆投下は「正しかった」と考えている。それに対し、日本の過去の調査では、日本人の約40%が、「原爆投下は非人道的で許せない」と考えており、「戦争終結には仕方なかった」という回答は約35%であった。これは一見当たり前のことのように思われるかもしれないが、ここで「ではどちらが正しいのか」と問うとしたらどうだろう。私は昨年度の授業において、原爆投下を肯定する側の根拠と否定する側の根拠とを公平に提示し、学生に議論させたが、その結果、肯定派と否定派は、最初の44%対56%から65%対35%へと逆転する結果になった。これはアメリカ人の調査結果と奇しくも似た数字である。学生のアンケートにもあったように、そもそも多くの日本人は、原爆投下を肯定する議論について触れたことがほとんどなかったのであり、それゆえこの数字の逆転は、日本人が単に無知であっただけだということを示しているのではないだろうか。実際、三浦俊彦の『戦争論理学』（2008）にあるような原爆肯定派の説得的な議論を前にして、否定派でいられる者は少ないだろう。だが本発表において、私は、三浦の議論を批判することを通し、それでも原爆投下は間違っていた、と論じる。

原爆投下の否定派は、しばしばヒューマニスティックな原理に基づいて原爆投下を批判するが、本発表の結論は実はむしろアンチ・ヒューマニスティックで冷酷とも言える以下のような原理から導かれる。

**歴史の理不尽性：**「たとえ主体が置かれた状況において別の選択肢が与えられておらず、行為論的には非がなくとも、あるいは通常の裁判であれば無罪となるような行為に対しても、歴史は時に有罪判決を言い渡す。」

発表においては、まずこの原理が正しいことを、具体例を用いて論証し、その上で三浦の議論が行為論的な枠組みを前提しており、歴史を論じる際にはそこに限界がある、と論じる。そして、行為論的な枠組みから自由に出来事を評価するとき、やはり多くの人が（アメリカ人であろうと）原爆投下は間違っていたと認めざるを得ない、ということを示したい。

## 2. 歴史・認識論

とはいえ、(単に非形式論理の教科書として意図されたものであっても) 三浦のような試みは、歴史の哲学の観点から見ても大きな意味がある。というのも、本来歴史の哲学は、歴史認識の「食い違い」をこそ主に取り上げ、それが何に起因するのか、どうすれば乗り越えられるのか、あるいはそもそも乗り越えるべきか、などが論じられるべきであると考えられるのに対し、これまでの歴史の哲学は、この食い違いについて、正面から論じてこなかったように思われるからである。

例えば「物語」として歴史を捉える野家啓一の立場(野家 1996、2005)では、「日本の物語」と「アメリカの物語」が食い違っていたとしても、片方が「間違っただけ」であると言うことが難しい。そこではそもそも食い違いは「乗り越えられるべきもの」という認識が希薄である。だがそれは、望ましいものではないと私は考える。

だが他方、上の理不尽性の原理は、野家の見解と一見親和的である。野家にとって重要なのは、解釈学的循環、あるいは「存在」と「認識」との間に伏在する循環関係(野家 2007, p. 48)であり、それは確かに理不尽性の原理をも含意するだろう。だが、そうした認識のダイナミズムは、(野家の馬鹿にする)「素朴実在論」とは何ら矛盾しない。むしろ、野家の哲学においては、過去は「知り得る」ものかどうかさえ、怪しい。「過去は未完結」と野家は言うが、新たな意味や価値、事実が付け加わるとしても、その前提となる事実の探究には(たとえ人間の限界があるとしても、概念的に)終わりがあるはずではないだろうか。むしろこうした野家の反実在論的態度は、彼の「時間は積み重なる」というテーゼを裏切るものであると、私は論じる。

中山康雄の『現代唯名論の構築』(2009)も、野家のこの歴史の哲学を取り上げて批判し、野家の形而上学的立場の困難を乗り越えるものとして「歴史叙述の唯名論的分析」を与え、「物語としての歴史」に対置して「仮説としての歴史叙述」を提出する。中山の見解は、皮相な科学主義的歴史観に比べれば、(歴史叙述の絶えざる吟味と更新を強調する点で)はるかに解釈学的伝統に親和的である一方、形而上学的には常識的な実在論であり、共感出来る部分も多い。だが、肝心の歴史認識の食い違いに関しては、あくまで「何度も問い直し」「吟味し続け」る、という一般的な話に終始しているように見える。

歴史の哲学において重要なのは、歴史認識の食い違いに特有の問題を明確にし、そこにおける「論証ではない説得」の役割を、非合理主義に陥ることのない仕方で理論的に位置づけることではないだろうか。そのためにはしかし、やはり形而上学にも踏み込まねばならない。そこで最後は、中山の4次元主義に基づく形而上学と歴史の認識論が(野家の哲学ほどには)実ほうまくかみ合わないことを指摘し、理不尽性の原理を含意する歴史の認識論と最もよく符号する立場として、野家のような現在主義でも中山のような4次元主義でもない、解釈学的かつ実在論的な形而上学を素描したい。